

ありがとう

つくしの里 保護者会会長

久保 寛子

つくしの里が平川の地に誕生してから早くも十年、あっという間に過ぎてしまいました。本当に長い様で短かった十年でした。この園は親達が、「親亡き後を幸せに」の願いのもとに、金を出し合い設立した更生施設で全国でも数少ないめずらしいケースです。発端としては、まず私たちの子供は一人では生きて行けない知的障害者です。親としては子供の頃から、親亡き後この子達は、誰が面倒を見てくれるのだろうか・・・と毎日悩み続けました。そんなある日、全国ではじめて更生施設をつくられた滋賀県の信楽学園の園長として活躍しておられた今は亡き池田先生が熊本に講演に来られた折、人のつくった施設に甘えるのではなく、同じ願いをもった親が集まって理想郷を親の熱意で設立しなさい・・・と励まされました。そして、年金は子供の金であって親に来るものではない。親は代弁者として責任を果たすべきですよ・・・と云われた言葉がその時深く深く、脳裏にきざみこまれました。昭和六十一年一月平等の精神を基本として設立準備委員会をつくり趣意書配布。会員募集をしながら法人認可に向かって活動をはじめました。認可をもらうまでの約五年。母親を主とした集まりの為、すべてに失敗も多く努力は報いられる事が少なく苦労の連続でした。ただ親の熱意だけで行政に訴えつづけ日夜奔走しました。

ただ「この子らの幸せの為に理想郷を夢見て」

はじめは十数名の会員でしたが平等に金を出して土地を購入したものの地元の猛烈な反対運動にあい、無念の涙を流してその土地をあきらめました。その理由は、その土地に障害者がきたら女性は夜間外出も出来ない。万一事故がおきた時は、誰が責任をとるかとつめよられ、戸別に雨の中を全戸お願いして回りましたが、冷たくあしらわれ、障害者に対する理解の無さにただただ情けなく無念の涙を流すのみでした。

現在の平川の土地は六ヶ所目です。記録ノートにはその間の事は詳しく記録されていますが、書面には書き尽くせません。その点、平川地区の方々にはよく理解していただき、暖かく受け入れてくださいました時は、一同感謝の涙を流し喜び合いました。また反面、全国より励ましの手紙に添え賛助会費までご協力してくださる多数の方々があり挫折する気持ちを力づけられ、「みすてる神あれば、助ける神あり」で勇気づけられながらがんばりました。また、会員の中には、五年間のうちには四・五名の脱会者も出ました。理由は問わず、「去る者追わず」で預り金全額返済いたしました。一步前進したら、十歩後退しながらの努力が続く中での会員同士の団結の心のきずなを保つ為には労をおしまず利益は微々たるものでも廃品回収をしながら日曜日には手弁当で廃品整理、草刈りで汗を流した日がどれだけ続いたでしょうか。それに並行して、海産物販売（わかめ・いりこ）で走りまわり心の輪がくずれない様に努力をし、あらゆる障害にぶち当たっても、「母は強し」の一念で

目標に向かってがんばろう・・・と互いに気持ちを励まし合い走りつづけましたが、あとは執念でした。またその陰には勉強会から設立まで常に応援して下さいました現河野園長の力強い支えがあったことは言うまでもございません。ある日は厳しい行政指導に連日連夜走りまわり、朝食からおにぎり持参で帰宅したのは午前二時という日もありました。でも、一つ一つ解決しながら前進を続けました。平成二年十二月正式の法人認可の通知を手にした時の感激は一生忘れる事は出来ません。それから十年、現在は五十名となり、園もすべてに充実され幸せな日々を送らせていただいていることは、保護者としてこの上もない喜びでございます。職員の皆様の努力に感謝しております。保護者も三十名から五十名という力強い協力組織となりました。当初の保護者は高齢者になったとはいえ、まだまだ皆さん元気で「この子の為にも一日でも長生きしなければ」と園の行事にもほとんど欠席なく参加され、気力とやる気は若い人には負けられん・・・とはり切っておられる方ばかりです。ただ事実として、忘れられない事は、共にがんばってきた仲間のリーダーだった下河辺さん（塩津くん義弟）と苦しい時代がんばっておられた谷崎君のお母さんがお亡くなりになったことは、つくしの里の歴史の中に永遠に残しておきたいと思います。今日まで「つくしの里」を育てて下さいました関係当局の皆様方は勿論、地域の方々にはあらためて心から感謝申し上げますと共に今後共、どうぞよろしく御支援御協力をお願い致します。十年目を迎え心より「ありがとうございました。」の言葉を添えさせていただきます。